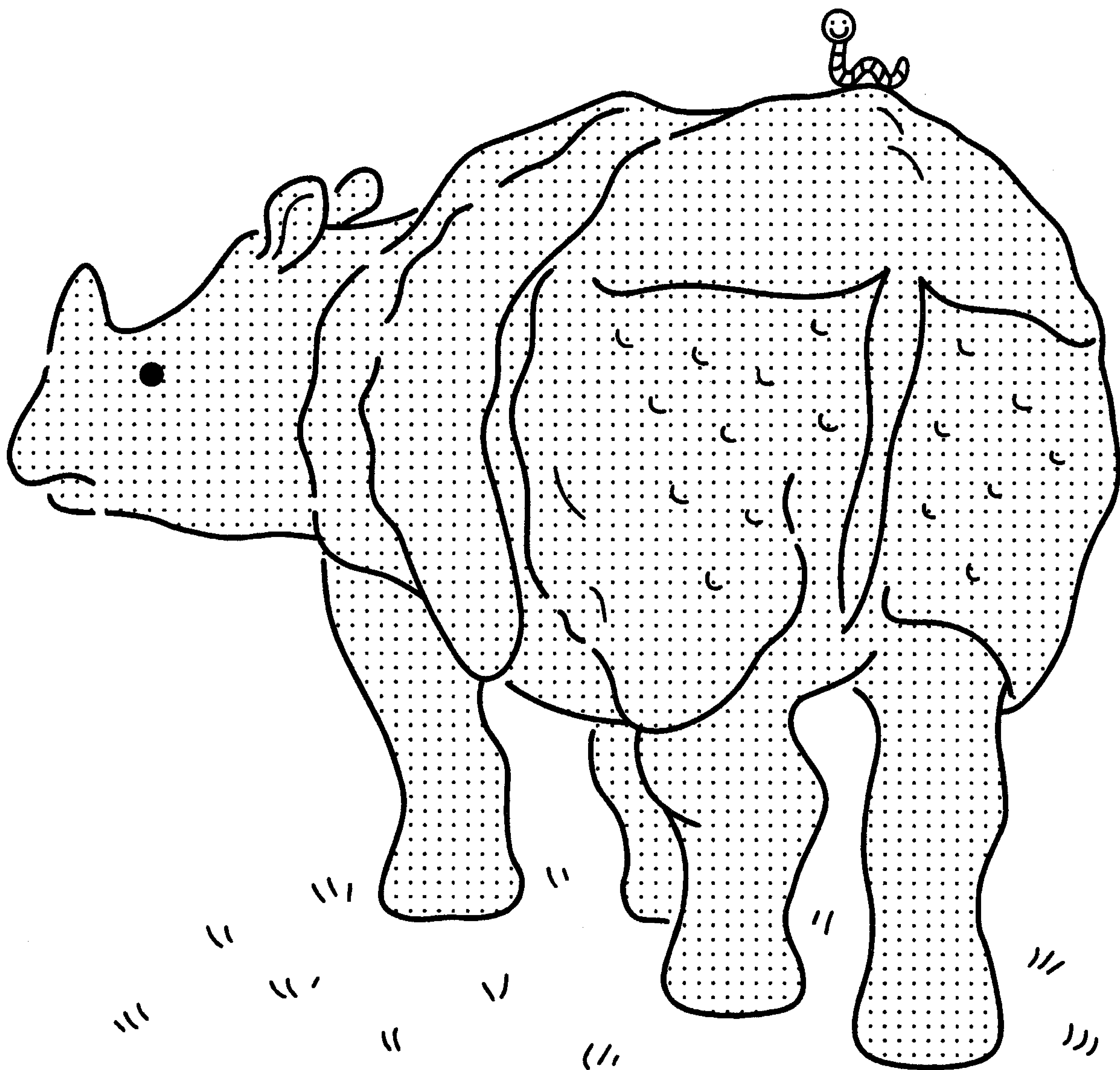


WAT

MONTHLY WAT VOL.1

1

各地で進む市民共同発電所



contents

03	特集 各地で進む市民共同発電所 地域に広まる市民共同発電所	<i>Rui Izumi</i> 泉 留維
05	こんなところがワットおー (1) ビック・ママは184 (イヤヨ)	<i>Eiichi Morino</i> 森野 栄一
07	レッツチタリポート (1) まちへの想いは、時を超えて	<i>Akemi Sugiura</i> 杉浦 明巳



地域に広まる市民共同発電所 Rui Izumi 泉 留維

「私達が生活する上で必要なもの」と言えば、いったい何であろうか。まずは、もっとも基本的なものであり、必要不可欠な食料や水であろう。そして、次に来るのが、おそらくエネルギー、特に電気であろう。多くの人は、野菜や卵の単価は知っていても、電気の単価(1kWhの値段)は知らないものだ。ましてや、その電気が具体的にどのような形で作られ、どこから来ているのかは、見当もつかないであろう。今回取り上げる「市民共同発電所」は、自発的な市民が資金や労働力などを提供し設置されるもので、自分たちの生活に不可欠な電気を環境負荷の低い方法(太陽光、風力、バイオマスなど)で作り出し、電気のあり方を再考していこうという活動を体現化したものである。多くの個人が参加する共同発電所は、自家発電のようなまったく個人が行う自己完結的なものに比べれば、設置までの合意形成や売電による収入の分配、参加時期によって異なってくる負担の公平化などの難題が多々ある。しかし、そのような難題を抱えつつも、やはり発電事業への市民レベルでの「草の根参加」に大きな意義がある。

それでは、日本全国で一体どれぐらいの市民共同発電所があるのだろうか。これに関しては、市民レベルでの動きなので完全に把握するのは困難であるが、筆者が調べた限りで確認ができたものをまとめたものが表1である。ここ1年ぐらいの間に、急速に広まっているようである。(表1)

市民共同発電所の具体的なあり方を見るために、一覧表の中にある「市民立江戸川第一発電所」について取り上げることにする。ここは、1999年7月に江戸川区の荒川沿いにNPO法人足温(そくおん)ネットを中心にして設置された発電所である。30枚の太陽光パネルを寺院の屋根に設置して、月平均500kWhを発電し、自家消費分を除く約50%が東京電力に販売されている。発電所の設置費用約590万円は、REPP(自然エネルギー推進市民フォーラム)などからの助成金、発電所から電力を享受している寺院からの売電収入と使用料の12年分の先払い料金、足温ネットが集めた寄付金、そして草の根金融NGOである未来バンクからの借入金によってまかなわれた。そして、この独自の取り組みとして2001年

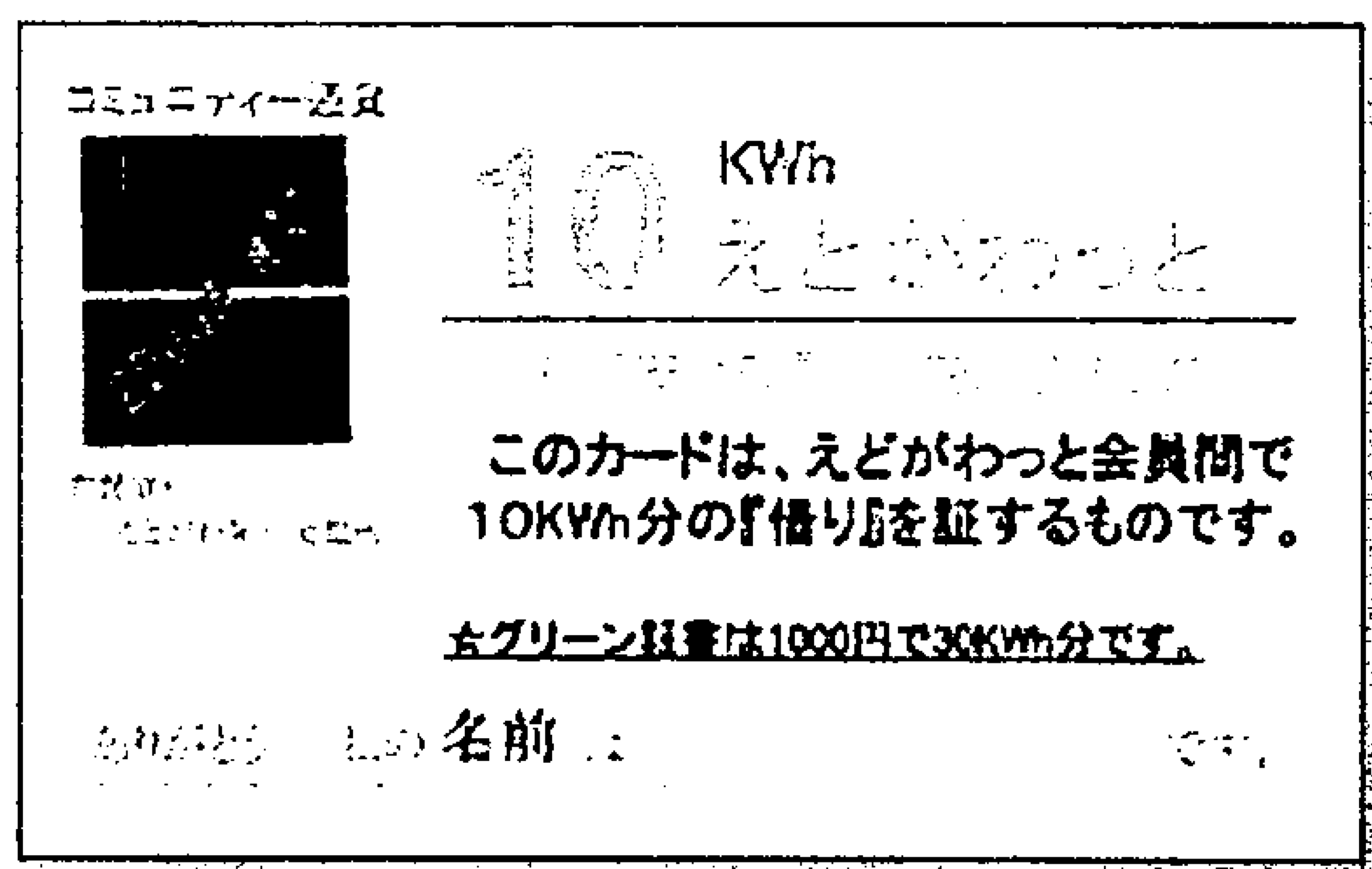
表1 主な市民共同発電所の一覧

名 称	発電開始日	設置場所	設置主体	種 類	出 力
てんとうむし一号	1997年 6 月	滋賀県石部町	いしべに市民共同発電所をつくる会	太陽光	4.3kW
大地・21	1997年11月	滋賀県安曇川町	市民共同発電所「大地・21プロジェクト」	太陽光	5.2kW
じゃがいも1号	1998年 6 月	滋賀県浅井町	湖北・市民共同発電所さといもプロジェクト	太陽光	2.7kW
市民立江戸川第一発電所	1999年 7 月	東京都江戸川区	NPO法人足温ネット	太陽光	5.4kW
陽だまり一号	1999年10月	大阪府美原町	関西ローカルエネルギーシステム研究会	太陽光	5.4kW
たいようこうはつでんし1号機	2000年 4 月	横浜市港南区	NPO法人ソフトエネルギープロジェクト	太陽光	3.0kW
文殊山	2000年 5 月	福井市	ふくい市民共同発電所を作る会	太陽光	3.5kW
石山市民発電所	2001年 2 月	滋賀県大津市	市民発電所・おおつ	太陽光	5.2kW
たいようこうはつでんし2号機	2001年 2 月	横浜市都筑区	NPO法人ソフトエネルギープロジェクト	太陽光	5.1kW
おひさま発電所1号	2001年 3 月	京都市左京区	法然院、NPO法人きょうとグリーンファンドなど	太陽光	4.0kW
ひかりちゃん	2001年 4 月	福井県今立町	丹南・市民共同発電所の会	太陽光	3.0kW
ほほえみ1号	2001年 6 月	滋賀県野洲町	湖国21世紀記念事業「お太陽基金」・野洲プロジェクト	太陽光	4.0kW
ひむか3号	2001年 7 月	宮崎県串間市	宮崎市民共同発電所設置プロジェクト	太陽光	3.7kW
風車村市民共同発電所(仮称)	2001年12月	滋賀県新旭市	市民共同発電を設置する会	太陽光	3.0kW
木質バイオマス発電プラント(実験)	2001年 1 月	滋賀県彦根市	森林発電プロジェクト、彦根県事務所	木質バイオマス	2.4kW
北海道市民風力発電所	2001年 9 月	北海道浜頓別町	NPO法人北海道グリーンファンドなど	風 力	1,000kW



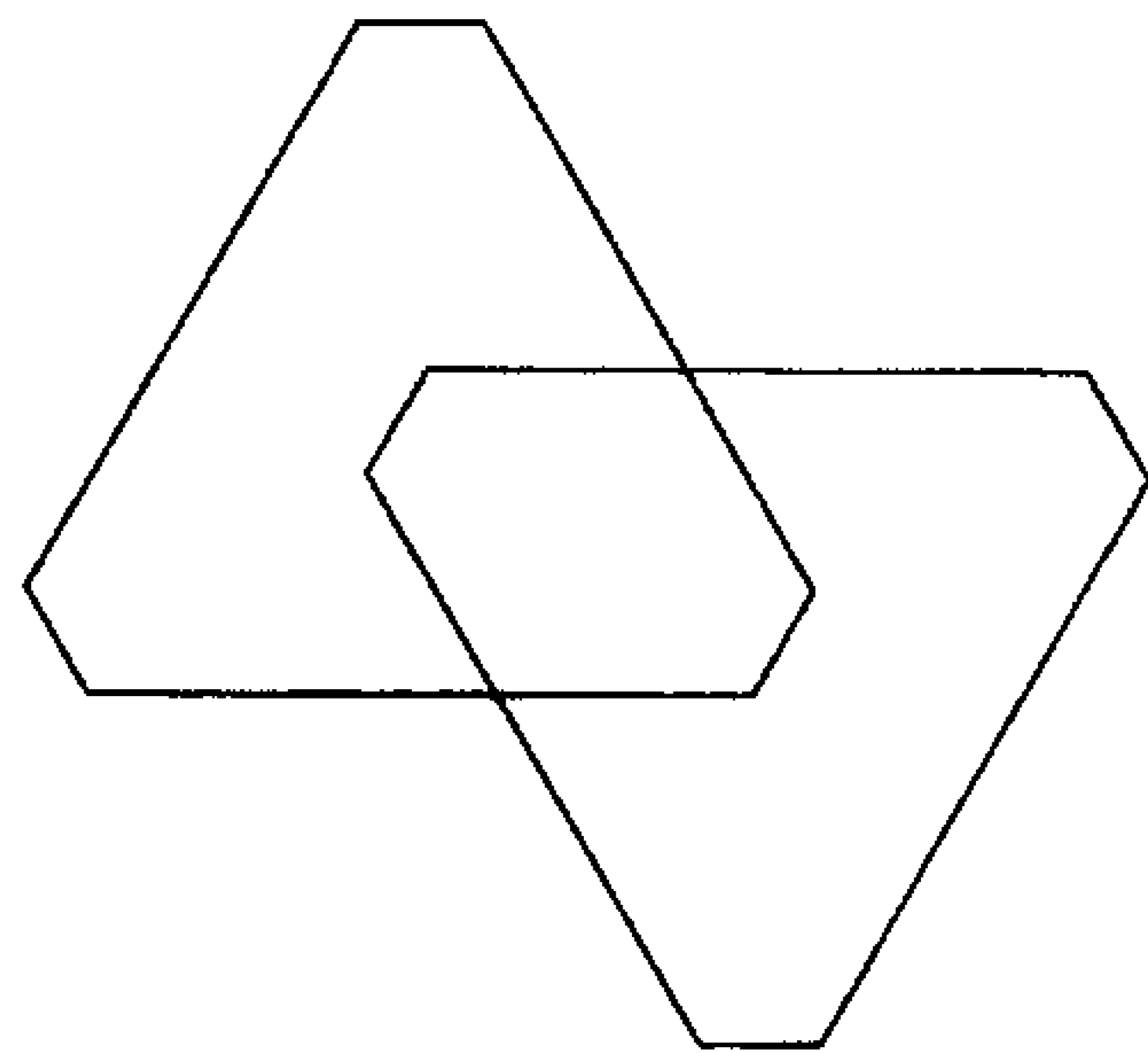
4月からグリーン電力証書と地域通貨の仕組みを取り入れた。現在、売電単価は、おおよそ22円/kWhであるが、二酸化炭素を排出しないなどといった自然環境への貢献を考慮すると、正当な評価がされているとは言えず、本来の売電価格55円/kWhと実際の差額33円/kWh相当を、電力を享受している市民に買ってもらい、その証としてグリーン電力証書を足温ネットが発行している。この証書1枚は30kWh(単価1,000円)に相当し、年間200枚限定で販売され、今年4月に販売を開始して以降、購入者は10月1日現在80名(124口)にのぼっている。そして、その証書を10kWh分(約300円相当)に分割した名刺サイズの「えどがわっと」(写真1)が地域通貨として使用されている。この「えどがわっと」は、ワット清算システムを参考にしてデザインされた地域通貨で、振出人の名前が表に来て、次から使う人は裏面に名前を書いて支払っていくことになる。足温ネットの情報によれば、これまでに、書籍代金の一部に充てたり、情報提供や原稿添削に対する謝礼、メールマガジンへの情報掲載料に使用されたりしているようである。ちなみに、未来バンクからの融資額分が、グリーン電力証書の販売収入によって早期返済されていくことになっている。写真1:えどがわっと(表)

写真1



太陽光を利用する場合、パネルの数によって、出力と事業費が決まってくる。例えば、滋賀県野洲町の「ほほえみ1号」は、事業費が約300万円、その費用はすべて出資(一口10万円)でまかない、後日出資者に配当している。風力の場合は、事業費が太陽光に比べて二桁も違い、北海道市民風力発電所は、2億円近い資金が設置にかかっている。木質バイオマスに関しては、未だ実験レベルにあり、実際の事業費に関するデータはない。表1を見てわかるように、太陽光の出力は5kW前後であり、現在の売電価格では事業費を回収するにはかなりの年月がかかり、さらに出資者に配当を行えるまでには相当の年月が必要である。その意味では、太陽光の場合は事業という側面は弱いと言えよう。一方で、風力の場合は、億単位の設置費用が必要であるが、いったん設置すると、北海道市民風力発電所で年間3200万円程度もの収入がある。ただ、太陽光のように家の屋根の上ならどこでもというわけにはいかず、立地にはかなりの制約がある。

簡単にまとめると、市民共同発電所には、3つの特徴があると考えられよう。1つは、売電から得られる収入面から見ると、「市民事業」の一環として捉えることができる。ただ、自然環境への負荷の程度にかかわらず一定である現状の売電価格ではそれほど多くの収入は見込めない。2つに、市民がエネルギー問題を考える身近なツールとして捉えることができる。3つに、地域社会における市民社会形成への一手段、自律的なコミュニティの創造に結びつくものとして捉えることができる。このように市民共同発電所は、市民が行う事業の1つであり、単なる消費者から生産を含んだ社会全体に対して責任を持つことへの行為として、今後さまざまな形で広がっていくことが期待される。



ビック・ママは184(イヤヨ)

..... Eiichi Morino 森野 栄一

ジョージ・オウエルが予見したビックブラザーが市民をすみずみまで監視する共産主義は崩壊して久しいですが、ITの発展のなかで軍事技術(とりわけインホ・ウォー・フェア)としてばかりか、市民の監視・支配の手段としてIT技術を活用する動きは専制的政治体制をとっている国ほど一生懸命です。中国の動きはあまりにすごいので置くとしても、政府批判のサイトが摘発されたという情報に接する機会も多いです。世界中の情報通信を傍受してきたエシュロンについては5年ほど前から追及してきましたが、ここではちょっと違う角度から地域通貨に絡めて問題にしてみます。

地域通貨もよく知られてきて、その副産物というか、必ずしも評価して下さるわけではない方々もいることを個人的に感じさせられる体験をするようになってきました。そういう体験のなかで、これまで、どのようなタイプの地域通貨についてもその利点・欠点を論じないでしたが、いくつかの角度からは議論すべ

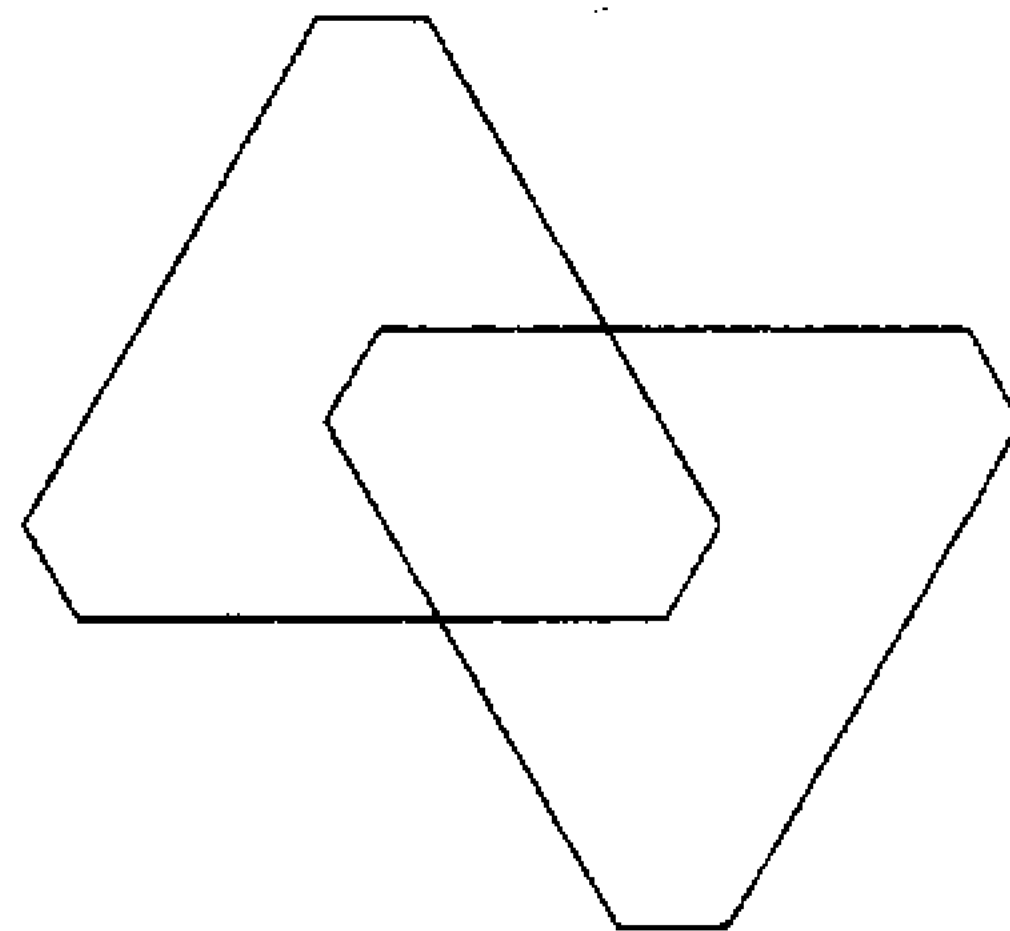
き時期に来ているのかな、とも感じ始めました。

特に地域通貨の電子化と、とにかく地域通貨といえはLetsで、それを観念的に捉えて共産主義運動のモデルであるかのように解釈する議論との関わりで、地域通貨参加者の自由や匿名性の確保の視点からです。ある報告書を見ましたら、地域通貨の歴史をロバート・オウエンからはじめているんですね。しかし、彼の公正労働交換所に対してマルクスがどんな批判をしていたかはよく知られていますね。そこでは交換所が申告された労働量を査定し、労働券が引き渡され、公正な労働と労働の交換が実現されるとされたわけですが、マルクスは、それはそうした銀行に専制的権力を与えるようなものだといったわけです。マルクスが直接に労働を交換しようとしたオウエンのシステムも、それとは違ったブルドンやマゼル、ボナールの交換を組織する銀行との相違を認識できなかったとはいえ、このマルクスの批判は重要に思われます。オウエンの意義を評

価する方には不満が残るかもしれませんが、マルクスはこうしたシステムに不可避な支配権力の発生とその基礎にある取引情報の独占をみていたのです。もちろんそんなことはフランスの社会主義者たちは先刻承知していましたから、彼らのどの銀行も取引が市場的に行なわれ、事が分権的に処理されるシステムを考え実践しましたが。

私たちは現在でも、情報の譲渡と入手に不均等が存在する社会に住んでいます。銀行がなにゆえ力をもっているのか考えてみれば、その一つに取引情報が集まるということが、つまり、情報を独占していることがあることがわかります。取引参加者は銀行ほどに情報アクセスに恵まれていないのが通例です。企業は取引先の銀行が自分の情報を知っている程度に銀行の情報をもっているわけではないですし、銀行がもつ情報にアクセスできるわけではありません。情報アクセスには非対称性が存在するのです。同時に自己情報譲渡に関し十分な自己決定性があるわけではなく、その点でも非対称です。情報の保有の不均等にくわえ、アクセスされた自己情報の利用を追跡する機会にも不平等が存在します。情報財をめぐるこうした相互性の欠如は地域通貨のいくつかのタイプにも観察されるところです。

そこでは取引履歴から取引者の情報までがシステムの運営者にアクセスされ、容易に入手されます。取引内容がシステム運営者というシステム参加者に上位し、情報へのアクセス権において特権を享受する存在の姿となるわけです。地域通貨によっては大手の資本が一見したところ一銭にもならないのに、



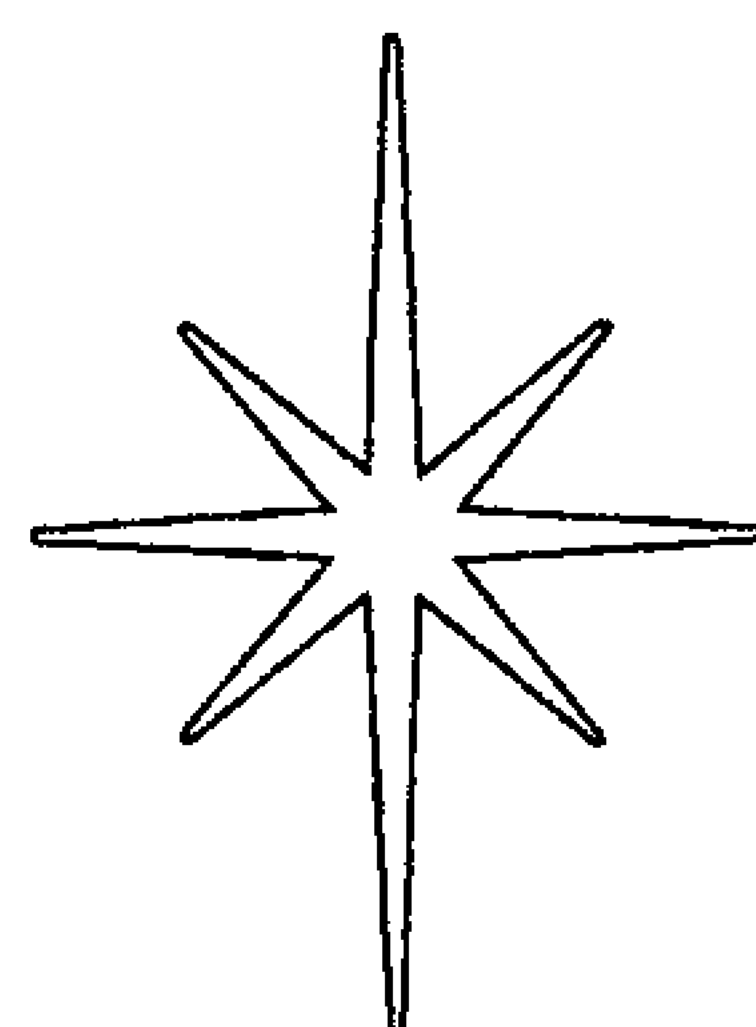
参加してくる理由の一つがこうした取引情報の管理、入手であることは容易に想像できます。Letsのような口座管理型地域通貨の電子化のさい、攻撃を受けやすい脆弱なシステムを使って取引処理をなそうとする試みやICカード型のトレーサビリ

ティが成立してしまうような個人の自立と自由を危険にさらすシステムの導入を進めているようにみえるところは、ビックブラザーの危険性を十分承知しておく必要があるでしょう。

もちろん、地域通貨は良き意図に基づき、人の支え合いと連帯をはぐくむものです。しかしそうした良き意図が永遠に続く考えるのは、ことが人のなすことである以上、いつ個人の自由や自立を、そしてプライバシーを侵害するものになるかもしれないことを考えると注意が必要でしょう。ましてやビックブラザーの時代からはるかに情報技術は進歩しています。なにからなにまで管理し、世話をやくビックママというべきかもしれません。そうした時代のなかで、わたしたちは電子マネーシステムでは100%の匿名性を維持しうるDigiCashのチャウムらが開発したネットワーク型の電子マネーを評価してきました。そこには、自己の情報譲渡を自分が決めるという自己情報譲渡の自己決定性の原則が守られていたからですし、そうした条件のなかで人は始めて真に対等な存在として、相互に尊重しあう関係を取り結ぶといえるからです。

WATシステムはそうした原則にたって人が同等者として連帯しうるシステムとして開発されました。

(続く)



まちへの想いは、時を超えて

..... Akemi Sugiura 杉浦 明巳

—半六郎との出会い—

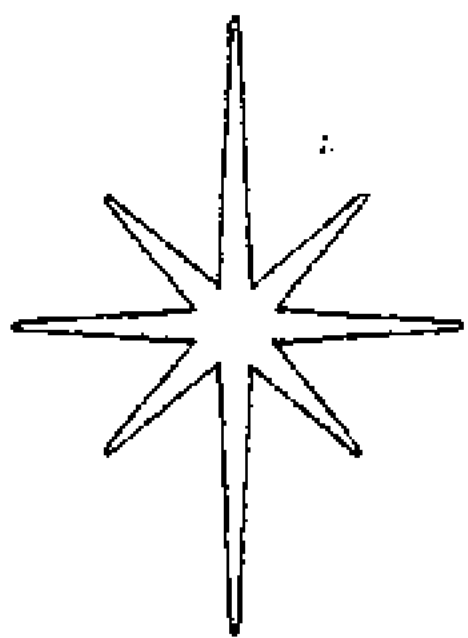
レッツチタの交換を現場で支えているのは、なんと言っても元気な女性たち。月に一度の味を結ぶ会「味結の会」は、お料理を通して確実に会員の結びつきを深めている。みんなおいしいものは大好きだし、思わず顔がほころんじゃう。

その、「味結の会」に続いて最近生まれそうなのが、美しさを結ぶ「美結の会」。これは、11月2・3・4日の中埜半六郎での茶会を手伝った着物好きが中心となって声がけをしている。体のサイズにも柔軟に対応でき、何代にも渡って大切に着られる着物は、高価だけれど環境に負荷をかけない衣類だ。しかも、おしゃれで美しい。ただ、着るのに手間がかかる、一人で着られないと言う理由でたんすの中で眠ったままの着物を持っている女性も多いに違いない。私の場合もまさしくそれだった。けれども、この茶会をきっかけに、はからずも世代に関係なく着物愛好者がいるということがわかったのは大きな喜びだっ

た。めばしい会員にお手伝いのお願いをすると「えーっ! 着物着るのー? 大変だあー」と言うのが第一声。けれども帰る時には「よっしゃー! 久しぶりに着るぞー!」と言う怪気炎があがってる。

中埜半六郎は、酢のミツカンの本家筋にあたる家で、黒板塀の「蔵のまち-半田」の抜群のロケーションの中にありながら、ここ30年間ほど時代の流れから置き去りにされてきた。明治時代、半田において第1回陸海軍大演習が行われたその前の年に、行幸を歓待するかのように建てられた半六郎は900坪におよぶ敷地の中に数寄屋造りの本宅・米蔵・茶室・門屋・職人小屋など300坪におよぶ建物が残っている。その建物を京風の日本庭園が取り巻く。

私が、初めてこの廃墟を訪れたのは4月。庭は雑草が生い茂り数メートル先もわからないジャングル状態。建物は所々崩れて、30年来積もったほこりやかび、くもの巣の陰気な空気が漂い、まさに得体の知れない物の怪にでもとりつかれそうな雰囲気。この



荒れ果てた廃墟で半年後にお茶会を
やろうととんでもないことを言い出した
のが、十字屋の達ちゃん(ペンネーム秋
月達郎という作家である)。それに引きず
られて地元の祭りの関係者、同級生など言葉
巧みに誘われた被害者が数名。一笑――

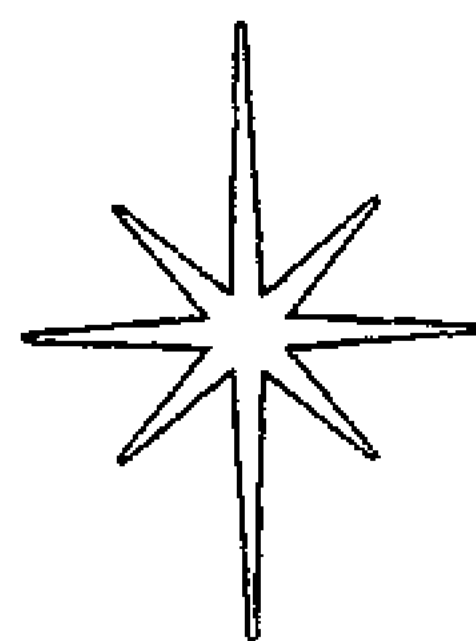
何を隠そう、達ちゃんと私の実家は、同じ通りの
商店街。私たちは幼馴染で、うちは履物商、彼のと
ころは美容室。半六郎は同じ町内にあり、まさに裏
庭のようなもの。この秋月なる男、故郷への思い一
方ならぬものあって、半田を安住の地とさだめ、ちょ
うど前年に嫌がる妻子を無理やり引き連れて帰って
きたものの、いざ、生活を始めると熱い思いとは裏
腹にいたるところで行政や民意の不本意なところが
目に付き、怒り狂っていたのだった。ちょうど、同じ
町内の醤油工場の町並みを取り壊されて、建売住
宅に変わったり、同級生のお茶屋さんが駅前開発
で古い数奇屋のお店を取り壊さざるを得ないという
ような事情が耳に入っていて暗い気持ちでいたとこ
ろだったので、みんな、何か変だよなと言うもやも
やした思いを持っていたんだと思う。そして、ただ文句
を言うだけでなく、行動に踏み出した。その、勇気
ある最初の一步、半六郎復興作業は半年後のお茶
会を目指して突き進んでいくのであった。

まるっきり草の根の持ち出し作業。地元と何らか
の関わりがある人が6~7人。後は友達関係。ホーム
ページを見て駆けつけてくれた奇特定の人もいた。
たまたま、関心を持ったばかりに引きずり込まれた
庭師や大工さん、測量士、プロの手を借りながら、毎
週土・日のお昼から真っ黒になっての作業が始まっ
た。平均すると毎回10人弱の人たちが集まって汗を

流し、暗くなると(電気がないので)
終わる。出入口にご当主から預
かった鍵を掛けおわると、裏手を流
れる川べりで月を眺めながらしばらく
雑談して帰るという繰り返し。それでも、茶
会を入れるとトータルして延べ500人ほどの人たち
の手が入った計算になり感慨深いものがある。作
業の前半は庭の整備が主だったので、力仕事が多
くて、男性陣がメインで黙々と働いていた。家では
土、日なのに家族サービスもできずに、妻や子供の
ブーイングを浴びながら、疲れた身体に追い討ちを
かけて働く。仕事にも差し支えるよなあーほんとに
ご苦労様だった。それに比べて、後半、屋敷のお
掃除とかが入ってくると、女性陣も加わって、がぜん
にぎやかになってきた。何せ女たちは手と同じくら
い口も動く。ペチャクチャとたわいもないおしゃべ
りからNYのテロや知多半島の行政、政治の話ま
で、そしてお決まりの結論は「女がもっといろんなど
ころに口をはさまないとダメねーもう、男たちに任せ
てはおけないわよねー」なんて笑い声が絶えな
い。……女はどこでも元気がいい。

毎回の作業のほとんどは地味で汚くて平凡なもの
だ。けれども時折、とってもしょろいできごとがある。
それは形として見えるものではなくて、新しい出会
いとか共感とか、そういう目に見えないもの。

夏休みを利用して大工さんの学校で勉強してい
る若い男の子が崩れた階段を直している。当然、好
奇心旺盛なおばさんは声を掛ける。こんな若い男
の子が専門的な技術を目を輝かせて話してくれる。
おばさんたちはしきりに感心して彼をほめそやす。
「失敗しても誰も文句は言わないから、思う存分腕



くしてくれる。あなたも相手もいい気分になり、あなたは人の役に立った喜びに輝き始める。喜びは喜びを誘発する。誰もがみんな持っている、人様に喜ばれたいという単純で明快な欲求。

あなたは必要とされている。そして自分への信頼を取り戻す。あなたのささやかな行いは、人の心を動かし、喜びや感謝の心は、人から人へ連鎖して広がっていく。それは輝きの連鎖。ほんとは誰もが輝いていたいんだ。輝いている自分が好きなんだ。自分を肯定できることが、人間への信頼を回復する鍵となる。まるでおもちゃの道具のような「地域通貨」が、人と人をつなげていく様子はまるで魔法みたいだ！世の中がいかにも複雑で外見上は紛糾しているように見えていても、その底流に流れる人間の情動の部分は極めてシンプルで、ちょっとした発想の転換が物事を逆転させてしまう。

「まちの星」プロジェクトは、まだ端緒についたばかりで、これからどうなるかわからない。もっと言えば、半六郎自身が個人の持ち物でその処遇に私たちは何ら口をはさめない。曲がりなりにも茶会が催せるほどに整備できたこれから先、これを維持し運営していくにはまとまった資金も必要になってくるだろう。もとの廃屋に戻すのはたやすいことだ。今後は、体ではなくて頭を使うことが必須だ。みんなで話し合い、知恵を絞り、交渉する。

私の生まれ育った町、下半田。母が生きていた頃はしょっちゅう、実家に入り浸っていた。子供の頃からの人間関係が、そのまま息づいている町。母を失ってから急にはたとりと足が途絶えた。それ

は、家の中に、街のそこかしこに母の姿が焼きついていて、胸が苦しくなるからだ。もう、10年もの歳月が流れているのに、相変わらず母のいない

実家は淋しい。同年だ、祭りだと何かと地

元の集まりの多い男性に比べて、嫁に出た女性は自分の生まれた地元とはどんどん疎遠になっていく。そんな中、今回の半六郎の話が舞い込んできたのだった。はからずも毎週通うことになった。茶会に着る着物を出して、あれこれと取り散らかしながら、想いは自然と母に向いた。母が一刺し一刺し縫って用意してくれた着物。とてもきれいな仕上がりで、これだけは自慢だった。母は商売柄、着物をよく着ていたし、私が学生の頃は反物を売ったり、縫ったりして、私の仕送りにあてていた。晴れ着、付け下げ、小紋、留袖、無地、紬、喪服（「喪服は濃い間柄の人が亡くなった時に着るのよ。誰のために着ることになるかわからないけど」と言っていた母の言葉がまだ耳に残っている。皮肉にも母のお葬式に、初めて袖を通すことになった。）着物の思い出はみんな母につながっていく。

ここ何年も虫干しもしなかった着物だけど、これから「美結の会」で活躍させてあげよう。半六郎—「まちの星券」、着物—「美結の会」。まるで手練り寄せられるように動いてきた半年間だった。何か、共時性のようなものを感じるわね—やっぱり。その思いを確信するもうひとつの出来事が…何と実家近くの商工会議所で来年から働かないかという話が舞い込んだ。半田ロータリークラブの臨時事務。

（続く）

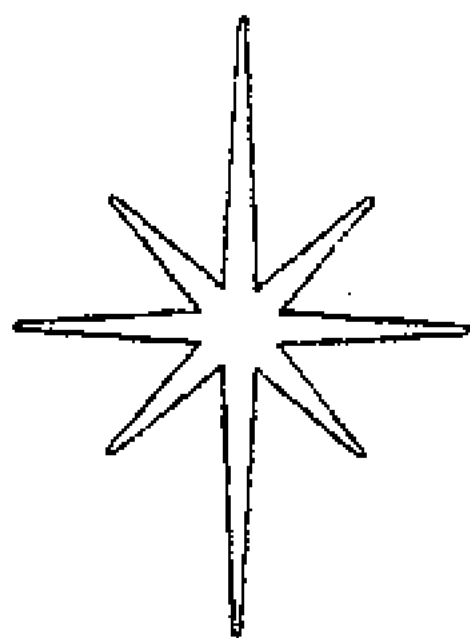
を振るってね」ふてぶてしいおばさんの言葉に彼は頭を掻く。

中学生や子供たちが参加する。

小さな手が雑巾がけをする。「畳の目に沿って拭くのよ」と教えられる。あるいはもらってきた畳をパズルのように並べ替える。「畳ってサイズが違うんだ。」子供たちの歓声は私たち大人に元気をくれる。

考えてみれば、決して楽な仕事ではないのに、うちのお掃除はほったらかしにして他所様のお宅のお掃除を喜んでさせてもらってる実に奇妙な集団だ。汚い、日に焼ける、蚊や虫に刺される……女にとってはどれもこれも避けたいものばかりなのに、この怠け者の私がどうして毎回せっせと半六邸に通ったんだろう？一つのことをみんなで何だかんだと言いたいこと言い合って、楽しんでやり遂げるということ。そこには、何の利己心もなく、あるのは子供のように無邪気な心だけ。実際、作業の中で何か新しく出てきたりすると、わくわくして、まるで子供の頃にタイムトリップしたかのように感じた。あれよあれよと目に見えてきれいになっていく過程を通して、汗と想いを分かち合う連帯感。自分の家をきれいにした時とは比べものにならない喜び・達成感。まだまだ、人間捨てたものじゃないわよと、素直に信じられる自分がいる。これって自分たちへの自信だし、明日への希望につながるよねー！

まっ、とは言うものの週末が来ると動きたくないと言う身体を無理やり引きずって、半六邸にはせ参じていたのも事実なんだけど……結構、自分をいじめるのが好きなものかもしれない……



—「まちの星券」誕生—

いつにも増して暑かったこの夏の作業は、ほんとに大変なものだった。

ボランティアの広がりも底をつき始め、参加者は数人にまで落ち込む。間に合わないという不安の中で、達ちゃんからレッツチタへのSOSが出る。それまでは、頭の隅に地域通貨が役にたつこともあるかなあとは思ってはいたものの、まるっきり私的な動機から始めたことだったので何となく気後れして黙っていたのだった。

けれども、レッツチタの会員にだけ声を掛け、チタを支払うのもおかしいものだ。いっそのこと手伝いに来てくれた人には全員に地域通貨を支払いましょう。そして、地元の商店でも地域通貨が使えるようにデザインして、ボランティアと地元の人たちに接点が生まれるようにしたら？外からの何の利害もないボランティアが「今日はいいい汗流したわ」なんて半六邸でのことをお店で話したら、しがらみのある地元の間人同士では容易に開かれない心の扉も、案外素直に開かれるかもしれない。そもそも、半六邸が地元の宝であるのなら、それを盛りたてていくのは地元の役目のはず。半六邸が将来うまくいけば、地元の活性化に一役買うだろうという青写真を鮮明にして、周囲の人たちをこの循環の中に巻き込んでいく仕掛けにしたい。

千葉のピーナッツで地域通貨を盛り上げるのは「地域の若者・ばか者・よそ者」と言う話を聞いて大笑いしたけれど、私たちの場合もまったくそれで、作業に精を出している地元の間人は周りから冷めた目で見られているという実態があった。さしずめ、私と達ちゃんなどは、ばか者兼、出戻りよそ者と言ったところか……

★ 第大優勝部 まなみの園勢 分 ★	★ 第大優勝部 まなみの園勢 分 ★	★ 第大優勝部 まなみの園勢 分 ★	★ 第大優勝部 まなみの園勢 分 ★
--	--	--	--

★

★		★		★		★	
日付:	名番:	日付:	名番:	日付:	名番:	日付:	名番:
(メセ)		(メセ)		(メセ)		(メセ)	
日付:	名番:	日付:	名番:	日付:	名番:	日付:	名番:
(メセ)		(メセ)		(メセ)		(メセ)	
日付:	名番:	日付:	名番:	日付:	名番:	日付:	名番:
(メセ)		(メセ)		(メセ)		(メセ)	
日付:	名番:	日付:	名番:	日付:	名番:	日付:	名番:
(メセ)		(メセ)		(メセ)		(メセ)	

★この券を捨ててから6ヶ月以内に使用しないと無効になります。★上段の入票がいっぱいになりましたら事務局にて交換します。★本席の円とは交換できません。★本席の島の動物園 (レッツチカ) 0669 (29) 4315

★この券を捨ててから6ヶ月以内に使用しないと無効になります。★上段の入票がいっぱいになりましたら事務局にて交換します。★本席の円とは交換できません。★本席の島の動物園 (レッツチカ) 0669 (29) 4315

★この券を捨ててから6ヶ月以内に使用しないと無効になります。★上段の入票がいっぱいになりましたら事務局にて交換します。★本席の円とは交換できません。★本席の島の動物園 (レッツチカ) 0669 (29) 4315

★この券を捨ててから6ヶ月以内に使用しないと無効になります。★上段の入票がいっぱいになりましたら事務局にて交換します。★本席の円とは交換できません。★本席の島の動物園 (レッツチカ) 0669 (29) 4315

10 | **WAT** Vol.1 January 2002

美術、市場、地域通貨をめぐって

白川昌生 著

水声社刊 定価2,800円

ISBN 4-89176-453-8 C0070

[美術作品の価格は誰がどのように決めるのか]

バブル経済の崩壊とともに危機にみまわれた日本の現代美術とその市場に深く絶望した気鋭の美術家が、勃興する<地域通貨>の運動をてがかりに構想する新しい美術、新しい市場、新しい共同体。腐朽しゆく近代の美術——制度を撃ち、来るべき美術、来るべき共同体へと向かう苦悶にみちた思考の精華。

ワット 1月号

2002年1月1日発行 第一号

編集/ワット友の会・発行/ゲゼル研究会

〒221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321森野気付

Tel.045-441-0407 Fax.045-441-0428

URL <http://www.watsystems.net/>

e-mail info@watsystems.com

無断転載・複写を禁ず。 Copyright2002ワット友の会